

# 出版文献データベース考察

—— 古山悟由編「90年代・出版関係雑誌文献目録（稿）」を利用して ——

伊藤民雄（実践女子大学図書館）

## 概要

『出版ニュース』と『出版年鑑』に掲載された「出版関係文献資料」の代替資料で網羅的な文献リスト構築を検討するため、古山悟由編「90年代・出版関係雑誌文献目録（稿）」を利用して、文献量からカテゴリ分け、雑誌種別、雑誌数、多産な重要著者、を検討した。その結果、カテゴリは20程度、雑誌種別は出版・印刷関係だけでなく、大学・研究所の紀要、図書館・情報学関係に留まらず、テーマによっては国文学関係雑誌、法学・法律雑誌と、広く目配りが必要であると判明した。

キーワード：出版研究、出版関係文献資料、出版文献データベース

## 1. はじめに

### 1.1 研究の背景

筆者は現在、2019年3月中旬号で休刊した出版業界誌の『出版ニュース』に毎月掲載されていた「出版関係文献資料」の代替資料を検討している。同資料は、出版業界の雑誌記事索引的存在で、1年分が累積され『出版年鑑』に収録されていた。「研究作業の第一歩は、先行研究成果の把握にある」<sup>1</sup>という独自の「箕輪出版学」を構築した箕輪成男の言葉を持ち出すまでもなく、良質の出版教育・研究の展開には、即座に先行論文や事例を把握する仕組み作りが必須である。

『出版ニュース』の最終号では、同資料は4つの大項目（図書館、読書、著作権、出版界）で区分され、更に「出版界」は更に8項目で細分されていた。最終号をカウントしたところ41誌から記事が採取されていたが、速報性を重視してか、採録誌は決して多いとは言えない。恐らく、通年だと100誌程度を対象に索引を作成していた、と考えられる。より網羅的なリスト作成には、収録誌を拡大する必要がある。

ところで筆者が身を置く図書館業界の業界関係誌を列举しろ、と求められたらそれ程困難なことではないが、「パッケージとしての書籍や雑誌を製作、発行、販売する一連の営みのことである。」<sup>2</sup>という出版の定義に照合すると、出版業界は業界三者に留まらず、印刷業、製本業、マスコミ・ジャーナリズム、広告、編集・デザイン等の業界が広く関係するため、出版業界の周辺業界にある図書館業界から『出版ニュース』や『出版研究』以外のコア雑誌を指摘したり、文献収集の範囲を述べたり、論文を多数産出する重要著者を列举したり、することは容易ではない。

既存の網羅的な文献リストを利用して、それらを探求しようと検討したのだが一つ壁に突き当たった。2000年以降に適当なリストが見つけれないのだ。そこで20年前の文献リストであるが、『出版研究』32～34巻（2001～2003）に渡って3回連載された古山悟由（のりゆき）

編「90年代・出版関係雑誌文献目録(稿)」に白羽の矢を立て、古山に利用を打診したところ、データ化も含め快諾されたので、同目録を利用して、本研究を行うことにした。

## 1.2 研究目的

2つの研究目的を設定した。①既存の出版関係文献の雑誌記事データ(文献リスト)から、収集すべき雑誌の収集分野や範囲を割り出すこと、②文献量から、研究テーマの全体像と変化の概要だけでなく、既存のレビュー論文(総説論文)で指摘されたポイントや結論を導き出すことができるか、以上2点である。なお、レビュー論文とは、ある一定期間に発表された特定分野・テーマについて概説や研究動向、展望を示す論文のことである。

## 2. 先行研究と研究対象について

『出版研究』に限定し調べたところ、文献リストを利用した第三者の分析を更に分析するという点で、蔡星慧(チェ・ソンヘ)の「90年代以降の韓国出版研究の動向」<sup>3)</sup>の研究が、今回の研究手法に近いと感じた。蔡は、文献を17のカテゴリ分けして、レビューを行っている(表1)。

研究対象とした古山の目録は、「日本出版学会賞」の選考用に作られたリストを増補したもので、採録では、極力現物確認を行っているが、不可の場合には二次資料10種が使用されている。文献は17の大項目(カテゴリ)で分類されている(表1)。

表1 出版文献のカテゴリ分け

「出版ニュース」最終号	古山悟由	蔡星慧
出版界-総論	①総論	①出版理論・出版学・出版教育
出版界-出版社	②出版社・書店	⑭出版経営
出版界-書店		
出版界-印刷・製本	③印刷・製本・装丁 ④編集	①印刷一般 ⑦編集製作実務・デザイン ⑯編集者・出版人
	⑤流通・販売・納本	⑤出版販売・流通論 ⑥出版広告論
	⑥電子出版	⑬電子出版・ニューメディア論
	⑦労働	④出版産業(構造)論
著作権	⑧法制・倫理	③著作権・出版法規 ⑧出版政策・制度・機関論
	⑨漫画・絵本	
	⑩歴史(江戸時代まで)	②出版史
	⑪歴史(明治時代以降)	
出版界-書籍	⑫図書	
出版界-古書		
読書	⑬読書	⑨読者・読書・図書館論
図書館		
出版界-雑誌	⑭雑誌	⑫雑誌論
	⑮翻訳	⑬海外(翻訳)出版
	⑯海外	
	⑰目録細目	⑩書誌・年鑑・辞書論
出版界-著者		⑰その他

### 3. 研究手法

古山の目録をデータ化し、表記の揺れのある雑誌名については、国立情報学研究所の総合目録データベース NACSIS-CAT の雑誌名で統一し、不備のあるデータ（巻号なし、著者の表記ミス等）については、現物雑誌の確認を行うなどして、再調査を行う。なお、古山は連載記事を1項目にまとめているが、本研究では1号1記事で再分割した（例えば、17回連載は17回でカウントした）。

分析には、①カテゴリ分けの比較（『出版ニュース』、蔡、古山）、②古山のリストを使い、カテゴリ、雑誌名、雑誌種別、著者名、論題をキーワード切り出しするなどした上で、文献数をカウントし、分析を行う。③レビュー論文の利用とその分析：『出版研究』の31巻から33巻に掲載された1990年代の各分野別のレビュー論文から、文献量から指摘されたポイントや導きだされた結論を確認する。

### 4. 結果と分析

#### 4.1 カテゴリ分けの比較

『出版ニュース』誌の最終号（2019年3月中旬号）、蔡、古山のカテゴリ分けを表1に示す。蔡と古山のカテゴリ分けは非常によく似ている一方で、『出版ニュース』には、カテゴリ自体がないものがある。詳細に見ていくと、不採録ではなく、別のカテゴリで対応していた（例えば、「電子出版」は「総論」に分類）。文献を同類で分類していくと、蔡もしくは古山のカテゴリ分けに近付くことが想像でき、それらを使用する場合、『出版ニュース』の採録記事は再分類が必要である。

表2 カテゴリ別の文献数

カテゴリ	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	件数
印刷・製本・装丁	25	60	32	35	29	52	51	72	82	46	484
海外	78	103	68	77	74	72	90	75	82	96	815
雑誌	86	81	84	88	94	83	110	105	92	77	900
出版社・書店	28	17	23	52	71	68	58	60	59	88	524
書誌学	20	24	26	0	0	0	0	0	0	0	70
図書	25	28	39	36	27	35	57	18	27	12	304
総論	64	40	23	61	62	87	73	79	96	113	698
電子出版	6	20	11	23	17	36	25	31	40	62	271
読書	18	23	24	32	35	19	22	6	17	15	211
編集	17	14	22	27	18	9	12	14	16	21	170
法制・倫理	79	74	54	60	83	64	67	51	45	62	639
翻訳	36	28	8	9	20	27	23	19	11	5	186
漫画・絵本	9	10	7	14	51	18	18	26	18	23	194
目録・細目	17	21	10	0	0	0	0	0	0	0	48
流通・販売・納本	32	42	22	35	28	76	84	52	49	32	452
歴史	92	104	89	113	130	129	140	118	99	82	1,096
労働	8	0	3	4	3	0	4	1	7	10	40
総計	640	689	545	666	742	775	834	727	740	744	7,102

#### 4.2 古山のリストを使った分析

古山のリストから得られたデータ件数は7,102件である（表2）。全体を眺めた限りでは、

1992年のみ600件を下回っているが、それ以外は700件前後で推移しており、極端な多寡はない。なお、1990～1995年の5年分は古山から提供された素データが利用できたので、『出版研究』掲載の目録を比較したところ、掲載時に、1992年の「書誌学」と「目録・細目」の合計36件が欠落していたことが判明したので、本研究では欠落していた36件を含め行った。

(1) 雑誌別の内訳

採録誌数は1,368誌にのぼる。単独誌の採録上位は、『出版ニュース』から501件(占有率7%)、続いて「創」350件、『日本古書通信』342件の順で、『日販通信』195件、そして、明らかに出版業界誌と認識できない国文学専門誌の『国文学：解釈と教材の研究』163件が5位に入っていた。採録数上位誌10位までで2,216件(31%)、20位までで2,839件(40%)、100位までで4,659件(65%)、203位(5件以上の採取)までで5,324件(占有率75%)である。上位15%の雑誌に75%の論文が掲載されていることから、ブラッドフォードの法則(=パレートの法則、80:20の法則)が成り立つようにも見える。一方で、1件1誌の採録が770件(占有率11%)あった。

雑誌種別で検討すると、出版・印刷関係は51誌3,130件(占有率44%)、大学・研究所紀要544誌989件(14%)、図書館情報学関係53誌476件(7%)、出版とは無関係と思われる国文学専門誌18誌352件(5%)の順となった。出版・印刷関係の雑誌に半分近くの論文・記事が掲載されるが、網羅性を求めると、それだけでは不十分である、と言える。

(2) 著者別の上位3位

7,102件の著者内訳は、3,092人の著者が6,852件を執筆し、残り250件は無著者記事だった。個別では、紅野敏郎(日本近代文学研究者)322件(占有率4.5%)、塩沢実信(出版ジャーナリスト、ノンフィクション作家)156件、豊田きいち(編集者、著作権研究者)125件の順である。長期に渡る複数の連載記事を持つ著者が上位となった。「多産で重要な著者」は文献数で分かるが、「多産ではないが重要な著者」も少なからず存在すると考えられるので、収録漏れを防ぐために、カテゴリごとの重要著者について、研究者の助言が必要であろう。

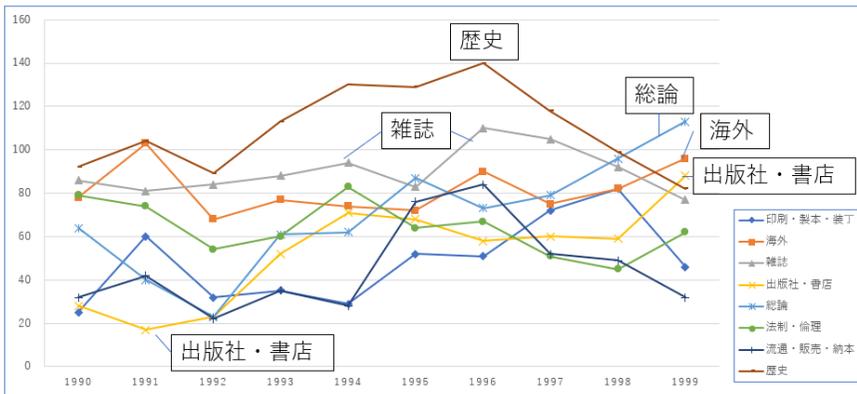


図1 上位8位のカテゴリの文献数の推移

### (3) カテゴリ別の文献数の推移

17 分野で優勢なのは「歴史」（出版史）研究（占有率約 15%、近世 731 件、明治以降 365 件）、続いて、「雑誌」（約 13%）、「海外」（約 11%）の順である（図 1）。図 1 は文献数の多い上位 8 項目の推移である。「歴史」と「雑誌」は 1996 年をピークに文献数は減少し、最終的に「総論」、「海外」、「出版社・書店」に逆転されている。中でも、「出版社・書店」は 1990 年代前半の文献数は多くはないが、中盤から増加している。

## 5. レビュー論文を利用した分析

『出版研究』の 31 号から 34 号まで、1990 年代の出版研究を総括することを目的に、レビューのレビューというべき植田の論文をはじめ、8 人によるレビューが掲載されており、文献量での判定が確認できたものを挙げる。

表 3 『出版研究』31 号から 34 号に掲載された「特集 1990 年代の出版研究」の文献

号	著者名	論文名	方法
31	植田 康夫	巻頭文 1990 年代の出版研究のレビューが語るもの (特集 1990 年代の出版研究)	31 号レビューのレビュー
	大和 博幸	90 年代の近世出版史研究	重要論文を列挙・レビュー
	佐藤 正晴	90 年代の近代出版史研究	重要論文を列挙・レビュー
	合庭 惇	1990 年代の電子出版	電子出版の解説
	森 啓	1990 年代の出版技術: コンピューター技術の進展による影響の諸相	出版関係の技術解説
	塚本 晴二郎 大久保 久雄	出版研究における法制・倫理 資料 出版関係文献年表--1989-1999 (特集 1990 年代の出版研究)	重要論文を列挙・レビュー 図書リスト
32	川井 良介	90 年代の雑誌研究	重要論文を列挙・レビュー
	吉田 則昭	90 年代の出版流通研究: 何が語られてきたのか	重要書籍を列挙・レビュー
	古山 悟由	90 年代・出版関係雑誌文献目録(稿)(1)1990 年~1992 年 (特集 1990 年代の出版研究・続)	本研究で利用したリスト
33	植田 康夫	90 年代の「読者論」と「読書論」	重要論文を列挙・レビュー
	中村 幹	90 年代の出版印刷技術研究	重要論文を列挙・レビュー
	植田 八潮	90 年代の電子出版研究	重要論文を列挙・レビュー
	古山 悟由	90 年代・出版関係雑誌文献目録(稿)(2)1993 年~1995 年 (1990 年代の出版研究(続々))	本研究で利用したリスト
34	古山 悟由	90 年代・出版関係雑誌文献目録(稿)(3)1996 年~1999 年	本研究で利用したリスト

大和博幸のレビュー<sup>4</sup>を読んで、植田康夫は「研究の厚みという点については、近世出版史が抜きん出ている」(p. 2)と指摘している<sup>5</sup>。前章で、「歴史(出版史)研究」は、文献全体の 15% を占め、近世と明治期以降の文献比率は、7:3 であることから、これは文献量で裏付けられた形である。また、その大和博幸は、「近世期の出版に関する研究は、主として文学と史学からなされてきている」(p. 20)と書いている。文献量では、近世文学研究は 329 誌から 731 件が採録されている。うち掲載件数 1 位は『日本古書通信』(75 件)だが、上位は国文学専門誌と大学・研究所紀要(主に国文学)が占めている。国文学と出版は一見無関係に見えるが、近世出版史研究の発表の場となっていることが分かり、留意する必要がある。

塚本晴二郎は、レビュー冒頭で、「ジャーナリズムの法制・倫理に関する研究は、はっきりとメディアで区別できず」(p. 8)と述べている。メディアの意味するところを「雑誌」とし検討すると、法制・倫理は、151 誌から採取されている。採録 1 位が『出版ニュース』(171 件)、続いて『創』、『波』という出版、マスコミ業界誌が上位を占め、次の集団は法学・法律関係の『コピライト』、『著作権研究』、『ジュリスト』になっており、主なものはこれらに掲載されるが、詳細に掲載誌を見ていくと、図書館情報学関係、総合誌、法学部紀要にも掲載されており、

雑誌種別で区別できるとも言えるし、言えないとも言える状況である。

吉田則昭のレビューは主に書籍が使われているが、「出版不況」本がブーム（p. 24）、「一般に、出版流通に関する著作では、著者らは「研究」というコトバを遠慮している」（p. 25）、「書店の「取引」「複合化」「郊外化」といった問題群がある」（p. 39）を指摘している。文献全体の論題の切り出しで、確認を行った結果、全文献数 7,102 件中、「不況」というコトバは 12 件、「取引」は 5 件、「複合化」と「郊外化」は 0 件であり、書籍と雑誌で状況は違うことが分かった。また、「流通・販売・納本」のカテゴリで、「研究」が使用されている論題は、452 件中 1 件であり、図書だけでなく、雑誌論文についても吉田の指摘通りであった。

以上、文献量からレビューを検討したが、裏付けられるものとそうでないものに分かれた。一方で、川井良介と中村幹が揃って、「幅広く学協会誌や紀要に掲載された論文まで検討するのは時間的制約からできなかった」（川井 p. 5；中村 p. 14）と述べており、予め網羅的な文献リストが提供されたならば、両者ともより達成感のあるレビューが執筆できた、と思われる。

## 6. まとめ

①既存の出版関係文献の雑誌記事データ（文献リスト）から、収集すべき雑誌の収集分野や範囲を割り出すこと、については、文献的根拠により 20 程度のカテゴリに落ち着くと思われる。また、雑誌数については、ブラッドフォードの法則に当てはめると、8 割程度の文献数を確保するには 200 誌程度必要であるが、最も論文記事が採録されていた『出版ニュース』が休刊となった現在では、再検証が必要である。雑誌種別は、網羅性を考えると出版・印刷関係の雑誌だけでなく、大学・研究所紀要、周辺領域である図書館情報学関係にも、テーマによっては、近世史研究は国文学関係雑誌、法制・倫理には法学・法律関係雑誌などにも目配りが必要である。筆者が所属する図書館情報学分野と異なり、広く研究者に協力を求め、指導・助言のもと索引、データベース構築を行わないと、重要文献の取りこぼしが発生するのは必至である。

②文献量から、研究テーマの全体像と変化の概要だけでなく、既存のレビュー論文（総説論文）で指摘されたポイントや結論を導き出すことができるか、については、可能なものと不可のものがあつた。ただ、研究者の研究時間を節約する点で、やはり網羅的なリストは必要と考えられる。

網羅的な文献リスト作成については、しかるべき場で研究者・専門家に問題提起したい。

---

1 箕輪成男「政策科学としての出版学をめざして」『出版ニュース』（2080），2006.8.中旬号，p.10.

2 「出版」『世界大百科事典 第2版』平凡社 2007. \*コトバンク (<https://kotobank.jp>) を検索

3 蔡星慧「90年代以降の韓国出版研究の動向」『出版研究』（36），2005，p. 39-50.

4 大和博幸「90年代の近世出版史研究」『出版研究』（31），2000，p. 19-34.

5 植田康夫「巻頭文 1990年代の出版研究のレビューが語るもの」『出版研究』（31），2000，p. 1-5.